

ジョルジュ・サンドとバルザック ——「人間喜劇」序文執筆の周辺——

持田明子

バルザックにとって小説は、彼の同時代人の思想、感情、実践、習慣、法律、芸術、職業、しきたり、地方性、要するに、彼らの生活を構成したあらゆるものについてのほとんど普遍的な検討の枠組であり、題材であった。彼のおかげで、過去のいかなる時代も、われわれの時代ほど、後世の人々に知られることはないだろう。過ぎ去った半世紀の各々が、バルザックのような作家により、まったく生き生きと写し出されて、われわれ、今日の探求者たちに伝えられているのであれば、何を差し出さぬことがあるか？(…) [バルザックの描き出したものは] われわれの知的、物質的、そして精神的状況の真の現実である。

(ジョルジュ・サンド、「人間喜劇」のための序文)^①

はじめに

曾祖父サックス元帥の親ポーランド国王オーギュスト二世とオロール・ド・ケーニヒスマルクにまで遡って、自らの歴史をたどった、膨大な自伝『わが生涯の歴史』(*Histoire de ma vie*)の中で、サンドはかなりの紙幅をバルザックに割り、1831年の出会いに始まる20年近い交遊のさまざまなエピソードを綴った。その中でバルザックが、サンドのそれと対比する形で、自らの創作理論を鮮明にした言葉を伝えている。

バルザックは、描写の真実性、社会や人間そのものの批判のために主題の理想化を犠牲にできるということを、彼の構想の多様性や強固さで、時とともに、私に理解させた。

彼はあとで次のように語ったことがあったが、それはまさにこのことを要約するものであった。「あなたはあるべき姿の人間を探しておられる。この私は、人間をあるがままに受け止めている。われわれはともに正しいのですよ。これら2つの道は同じ目的にたどり着くのですから。私は並外れた人間もまた好きですよ。

私自身、その1人です。それに、凡庸な人間どもを際立たせるために彼らが必要なのです。気まぐれに彼らを犠牲にすることは決してありません。だが、この凡庸な人間どもは、あなたに関心を抱かせる以上に私の興味を引くのです。私は逆方向で、つまり彼らの醜悪さや、愚鈍さにおいて、彼らを大きく見せ、理想化します。彼らの奇形をぞっとするほどに、あるいは、グロテスクなまでにするというわけですよ。あなたにはそんなことはおできにならないでしょう。悪夢にうなされるような人間や事物をあなたが見ようとなさらないのはよいことですよ。可憐さや美しさの中で理想化なさるがいい、それが女性の作品ですよ。」

隠した軽蔑も、皮肉もなく、バルザックは私にこう語った。彼の親愛の情は誠実だった^②。

I.

1832年、「新哲学短篇集」(*Nouveaux Contes philosophiques*)の出版にあたって、バルザックが出版者シャルル・ゴスランへ宛てた手紙、

《シャルルかG・サンドが承諾してくれれば、私を大いに支援してくれることになりましょう。》^③ (1832年9月30日付)

あるいは、「ルヴュ・ド・パリ」誌 (*Revue de Paris*) 編集主幹アメデ・ピシヨがバルザックに宛てた手紙の追伸に認めた言葉、

《『ルイ・ランベール』(*Louis Lambert*)に関するサンド氏の記事が届くのを待っています。》^④ (1832年11月23日付)

が示す通り、バルザックは、サンドが『アンディアナ』(*Indiana*)で文壇に登場したその年にすでに、自らの作品のための序文執筆をサンドに依頼したと思われる。さらに、《思想、主題、断章》(*Pensées, sujets, fragments*)と題した小さなアルバムに、1832年の終わり、

19世紀風俗研究。

ジョルジュ・サンドの序

私生活情景 (ベロック夫人序)

社交生活情景 (ダブランテス夫人序)

11時と真夜中の間の会話

サロンの情景

村の情景^⑤

と、作品統合の構想を書きつけ、他の女性の名とともに、ジョルジュ・サンドの名を

記している (folio 22)。

こうしたバルザックの意図にもかかわらず、この時期にサンドがバルザックの作品に何らかの序文を執筆した形跡はない。

II.

1831年以来、共に、いわば文学修業の日々を過ごしていた、ジュール・サンドーとの1833年3月の破局で、ジュールの庇護者を自任していたバルザックとの関係が一時的に疎遠になりはしたものの、1838年2月24日から3月2日までバルザックはサンドのノアンの館に滞在した。

この年、2月初めから、ベリー地方ノアンに程近いイスーダンの友人宅にあったバルザックは、2月19日、サンドに訪問の希望を伝える。

《親愛なる著名な方、あなたがまだベリーの地にいらっしゃることを知りました。ノアン詣をしたいとずっと思っていた私ですから、お訪ねして留守でないかどうかお伺いしようと、一筆認めた次第です (...) ベリーの牝ライオンであれ、ウグイスであれ、その洞穴なり巣にいるのを目にせず、戻りたくはありません。何しろあなたは力強さと優雅さを持ち合わせておいでです (...)》^⑥

そして、《夕方5時から、夕食をはさんで明け方の5時まで》^⑦(ハンスカ夫人へのバルザックの手紙、3月2日付)、2人は談論のときを過ごし、その対話の中から、バルザックがやがて『ベアトリクス』(*Béatrix*)や『2人の若妻の手記』(*Les Mémoires de deux jeunes mariées*)となる、着想を得たことは繰返し、語られてきたが、とりわけ、後者には、

ジョルジュ・サンドに。

親愛なるジョルジュ、この献辞はあなたの輝かしい名前に何ひとつ加えるものではありませんが、あなたの名前はこの本に非常に美しい照返しを投げかけてくれましょう。私の方に打算も謙遜もありません。どちらかが旅に出たり、不在であった間も、2人が仕事に追われ、世間の意地悪な仕打ちにさらされていた間も、2人の間にずっと続いた真の友情を、こうすることで、証したいのです。この感情はおそらく、決して変わりはないでしょう^⑧。

という言葉で始まる美しい長文の献辞を添えていることは周知である。

バルザックは、前扉に《1842年1月20日 パリ ド・バルザック》^⑨と自ら記してサン

ドに送る。一方、サンドは直ちに読了し、著者の出した結論に同意できない旨を明言しながらも、作品への賛辞と献辞への謝意を書き送る。

《あなたの献辞に感動しておりますし、あなたの作品に心を奪われておりますわ
(…) この2晩を読みふけて過ごしました。これまでお書きになった中でもっとも優れたものの1つですから、この献辞を誇らしくも思います。でも、あなたの結論に達することはできません。それどころか、あなたはご自身が立証しようと思われることの正反対を立証されているように私には思われます。利点と難点をかくも強く、かくも率直に感じるのは、あらゆる偉大な知性の特性です (…))》^⑧
さらに言葉を続けてサンドは、他の誰よりもよくバルザックの本質を理解している人間として、以前から抱いてきたバルザック論執筆の望みを打ち明ける。

《ずっと前から私は、あなたについて真剣に論じる長文の記事を書くことを切望しています。あなたにかつてないほど、さまざまな問題で異論を唱えるつもりです。けれども、これまで誰1人としてあなたを置くことのなかった高みにあなたを位置づけましょう。あなたは一度として理解されなかったと私は思います。そして、私はあなたを十分に理解しているように思われます。けれども、あなたの同意なしにこの仕事をするつもりは断じてありませんし、あなたの判断にゆだねずに、発表するつもりもありません。友人を、当人の意に反して評価することは誠意からのものや、真の友情からのものと私に思われたことは一度としてありません。
(…))》^⑨

III.

こうした友情と相互理解の深化の中で、バルザックはサンドに「人間喜劇」のための大がかりな解題を懇請する。ハンスカ夫人に宛てた手紙に、小説家は明確に——夫人の嫉妬心をかきたてぬよう、強調しすぎた嫌いは否めないが——その意図を綴る。

《私は「人間喜劇」(*La Comédie humaine*) (統合した私の作品に付ける総題です)の序文を彼女に頼み込み、決断する時間を与えました (…)
彼女はよく考えた末に、承諾しました。彼女は私の作品、私の企て、私の人生、私の性格について申し分のない見解を書き上げるでしょう。それは私がこれまで対象となってきた、あらゆる卑劣な言動に対する反論となることでしょう。彼女は私の復讐をしようとしています。こうした感情に彼女が突き動かされているとき、彼女のペンは雄弁になります。彼女にいくつかの情報を提供するために、彼女が帰郷するノアン＝ヴィックに行くことが必要になると思われます。(…) G・サンドはこの仕

事をするのに2か月を求めています。(…))^⑩ (1842年4月20日付)

だが、この時もまた、バルザックがこれほど当てにしていた記事の執筆をサンドは断念せざるを得ない。

《視神経の耐え難い、そして絶え間なく襲ってくる痛みのために、読むことも、書くことも、外出することもできず》《この2か月というもの、どんな仕事も不可能でしたし、禁じられてもいました。》《もし、あなたの出版者が刊行寸前であるならば、私の序文を当てにすることはできません。時間と、そしておそらくは体力も、絶対的に不足しています。でも、作品の後に論文が出て構わないではありませんか?》^⑪ (1842年7月24日付)

周知の通り、バルザックはもはやサンドのペンを待たず、自ら「総序」(*Avant-propos*)を書いた。

IV.

バルザックの死の翌年の1851年、サンドはエツツェルの編集により、挿し絵入りの著作集を刊行。その機会に、『フランス遍歴の仲間』(*Le Compagnon du Tour de France*, 1840)の作品解題を執筆するが、その中で、かつてバルザックと交した対話——おそらくは、1838年の早春にノアンの館の《炉辺で交した対話》^⑫を想起した。あえて対比を際立たせていることは言うまでもない。

…作者は真に進歩主義的な思想に基づいて、『フランス遍歴の仲間』を書いた。今の時代に見られるような進歩的職人を創り出そうとしたとき、この人物に、眼前の社会に対する考えと、未来の社会へのあこがれを抱かせないことは作者には不可能であった。しかしながら、[この作品が世に出ると]ある階級では、こうした職人はあり得ぬことだと、過度であると声高に非難し、民衆におもねっていると、彼らを美化しようとしているとして、作者を強く批判した。もちろんのことだ。だが、作者の描き出したタイプが理想化されすぎていると仮定して、他の階級の人物であれば作者に許されることを、民衆に対しておこなう権利がいかなる理由で作者になかったのか? 聡明で善良な職人たちがこぞって、そうしたタイプの人間になりたいと願うように、可能な限り感じのよい、そして勤勉なタイプを創

り出さぬことがどうしてあろう？ 一体、いつから小説は、人間や現代の事象の耐えがたく、冷ややかな現実をどうあっても写し出すものになったのか？ そういうものであり得ることは作者もよく承知している。その才能に対して、作者が変わらず敬意を表してきた大家のバルザックは「人間喜劇」を書いた。この偉大な作家と友情の絆で結ばれていたが、作者は人間に関わる事象をまったく異なった見地から見ていた。『フランス遍歴の仲間』を執筆していた頃、バルザックに言ったことを思い出す。『あなたは「人間喜劇」をお書きになっていますが、その題名は控え目ですね。ドラマや人間悲劇と名づけることがおできになるでしょうに。』この言葉に彼が答えた。「確かに。ところで、あなたの方は人間の叙事詩をお書きですな。」作者は言葉を継いだ、「それでは題名が高尚にすぎましよう。でも私としては人間の牧歌を、詩を、人間味のある小説を書きたいのです。結局、あなたはあなたの眼に映るままの人間を描こうとなさり、また、それがおできになります。それもいいでしょう！ 私の方は、こうであってほしいと願うとおりに、こうあるべきだと信じておりに描きたいのです」と。われわれは互いに張り合いはしなかったので、たちまち相互の正当性を認めた。(…)^⑩

バルザックの思い出から離れ、サンドは、社会のいわば底辺にあって、虐げられてきた長い歴史を持つ民衆、そして女性に貼りつけられた劣等性の空虚さを告発し、《今や反駁することさえ子供じみた偏見》^⑪と言明する。

労働者は別の人間とまったく同様の人間であり、別の紳士とまったく同様の紳士である。このことに今なおびっくりする人間がいることに作者は大いに驚く(…)道義をわきまえ、敬虔であることを学ぶのはコレージュではない。そこではギリシャ語とラテン語しか学ばないのだから^⑫。

秘密結社の1つ、職人組合devoirに題材を求めたこの『フランス遍歴の仲間』から数年後の1845年8月、『アントワヌ氏の罪』(*Le Pêché de Monsieur Antoine*)を執筆中のサンドは、その掲載誌となる「エポック」誌(*l'Époque*)の編集者アンテノール・ジョリに宛てた長文の手紙の中で、ウォルター・スコットを引きながら、小説理論を展開しているが、そこで、

《いわゆる芸術のための芸術はかつて一度として存在したことはありませんし、今日、われわれが意味しているところを、ゲート筆頭に過去の大家たちが知るとすれば、彼らは笑ったにちがいありません。》と述べた後で、

《風俗を退廃させる、あるいは、浄化する思想を語らずに、どのように風俗を描き出

せましょう?》^⑩と、風俗小説と思想小説を区別することの不可能に言及する。

さらにその秋に執筆した、『魔の沼』(*La Mare au Diable*)の第1章「作者から読者へ」の中でサンドは、「死の百態」と題するホルバインの銅版画(*Simulachres et historiées faces de la mort, autart élégamment pourtraictes, que artificiellement imaginées*)に描かれた、おぞましくも悲惨な、『社会の真実の絵』^⑪を論じながら、自らの文学論を重ねる。

現代の芸術家の中には、彼らを取り巻いているものに真剣なまなざしを向け、苦痛を、悲惨のおぞましさを、ラザロの寝藁を描くことに専念している者たちがいる。これは芸術と哲学の領域になり得る。だが、悲惨をあまりに醜く、あまりに卑しめられ、時にはあまりに腐敗し、あまりに犯罪的なものに描くことで、彼らの目的は達せられたであろうか。その効果は彼らが望むように、救済になるであろうか? (...)

作者としては、芸術家たちに社会の傷の深さを測り、われわれの眼前にそれをむき出しにする権利を否定するつもりはない。だが、激しい恐怖と脅しを描き出す以外に、今、することはないのであるか? (...)^⑫

そしてサンドは芸術の使命を謳う。

芸術の使命は感情と愛の使命であると、今日の小説は素朴な時代のたとえ話や寓話のかわりをすべきであると、芸術家は、彼の描き出すものが抱かせる恐怖を和らげるために慎重さと和解の何らかの措置を提案するという任務よりも、もっと大きな、もっと詩的な任務を持っていると信じている。芸術家の目的は、その関心の対象を愛させることであるべきであろう。そして、必要とあれば、その対象を少しばかり美化したとしてもとがめるつもりはない。芸術は実証的な現実の研究ではない。それは理想的な真理の探求である^⑬。

この芸術の有用性を確信する小説作法が〈芸術のための芸術〉を旗印とする文学者たちの嘲笑の的になった^⑭ことは言及するまでもない。

この時からほぼ30年後の最晩年、フロベールに宛てた手紙に、自らの40年にわたる文学活動を静かに振り返るサンドの姿を読むことができる。

《私の野心はあなたほど大きくはありませんでした。あなたはあらゆる時代のた

めに書こうとされます。この私は、50年後には完全に忘れられているでしょうし、厳しく批判もされましょう。それが第一級でない事物の法則です。私は1度として自分が一級だと考えたことはありません。私の考えはむしろ、たとえ何人かであれ、同時代の人々に働きかけ、喜びと詩情の私の理想を彼らに共有させることでした。この目的をある程度、達成しました。少なくとも、そのためにできる限りのことをしましたし、今なおやっています。(…)けれども、あなたにあっては目的はもっと広大です。私にはよく分かります。そして成功はもっと遠くにあります。》^⑩ (1872年12月8日付) (下線、引用者)

V.

クルツィウスの表現を借りるならば、バルザックの没後、《1850年から1860年にかけて…バルザックについての出版物が目白押しに刊行され始め》^⑪、サンドもまたその一端を担った。

「ル・シエクル」誌 (*Le Siècle*) のアルマン・デュタックからの執筆依頼については、1853年5月2日付の手紙、

《バルザックに関する記事は、私が友情を抱き、また、常々、大家と目してきた彼のことでありますから、喜んで執筆するところですが、目下、「ル・シエクル」誌への『名付け子』 (*La Filleule*)、カド書店から刊行する『名付け子』と『笛師の群れ』 (*Les Maîtres sonneurs*) の校正、加えて筆を進めている急を要する仕事に追われて、1日1時間さえ割くことができない状態です。》^⑫

が伝えるように、多忙を理由に断っているが、翌6月には、フルヌ版の「人間喜劇」を買い取ったアレクサンドル・ウーシオーの依頼を、3か月の時間的猶予を条件に承諾。

1853年6月10日、両者の間で、8条から成る契約書が作成され、《バルザックに関する12,000字から15,000字の書誌学的ならびに文学的解題を執筆し、この日から5か月以内にウーシオーに引き渡すこと》(第1条)が約された。この契約書は、サンドの論文の出版に関するウーシオーの諸々の権利や、稿料支払いの条件に加えて、《ウーシオーはサンドにこの日から1か月以内にバルザックの全作品集を貸与し、さらに執筆に必要な全ての資料を提供すること》(第4条)、《校正はサンドがおこない、校正刷りはウーシオーの送料負担でノアンに送付され、サンドは1週間で返送すること》(第5条)など、細部にわたって規定した^⑬。

一方、バルザック夫人(ハンスカ夫人)は出版者ウーシオーとの契約書に、「人間

喜劇」第1巻の巻頭につける解題に関して、《ウースイオーがその稿料を負担すること、解題はあらかじめバルザック夫人の判断にゆだねられ、夫人はそれを修正する権利を有すること》を明記させた^④。

バルザックに関する文章執筆の経過を伝える手紙から、きわめて短時間で書かれたと推定される。

ピエール＝ジュール・エツツェルへの手紙、

《ノアンを発つ前にバルザックについての作品解題のようなものを書かなければなりません。》^④ (10月14日付)

アドルフ・ルモワヌ＝モンティニ (ジムナーズ座支配人) への手紙。

《小説^④を脱稿しました。明日、バルザックについてのささやかな文章を書きます。その後で、ジムナーズ座のための仕事に取りかかります。》^④ (10月21日付)

(※『アドリアニ』(*Adriani*))

オーギュスティーン・ドゥ・ベルトルディへの手紙

《小説1作と、バルザックの新しい版のための序文を書きました。これが今月の私の仕事ですよ。》^④ (10月28日付)

VI.

校正刷りが刷られ、11月21日、ウースイオーはバルザック夫人へ、《契約に従って、サンド夫人による解題を「人間喜劇」の巻頭に付すことへの同意書とともに校正刷りを送り返》してほしい旨、また印刷に付すことに同意できない場合は、《異議を直接、サンド夫人に伝えるのでなければ、(ウースイオーに)知らせ》てほしい旨の送り状とともに、校正刷りを送った^④。

バルザック夫人は時をおかず、およそ7,000字に及ぶ長文の手紙をサンドに書き送り、《他のペンが、しかもその多くが、かくも不器用に作家を解剖しているのに比して》サンドが亡きバルザックを、《そうであったとおりの——私が知り、愛したとおりの——生きている、心臓が鼓動している現実の人間として描き出した》^④ことを丁重に謝しながらも、サンドの論文の細部にわたって異議を挟み、削除や訂正を強く求めた。中でも、夫人が《冒瀆》であるとして激しく反発し、《削除ないしは変更》を迫ったのは、《彼〔バルザック〕は天成の芸術家ではなかった！》の箇所であった。少しく引用

しておこう。

《何ということでしょう。こともあろうにあなた様が！ 芸術家の代表とも言うべきあなた様が！ 偉大な、この上なく偉大なジョルジュ・サンドである、あなた様は、人は生来の傾向や血、感性や神経、心や頭脳、等々で、神聖にして、人間的な権利で、芸術家に生まれつくことはないとお思いなのではないでしょうか？ 人は料理人になるのだとプリヤ＝サヴァランが言うように、人は芸術家になると、お思いなのではないでしょうか？ (…) とんでもありません——あなた様のこの言葉を黙認するわけにはまいりません——これはバルザックに対する以上にあなた様にふさわしい言葉ではありません。フランス学士院会員のだれそれ（たとえばドゥラロッシュ氏やサント＝ブーヴ氏）についてであれば、彼らは生まれながらの芸術家ではない、と言うこともできましょう——けれども、バルザックについては否です！ 絶対に！ バルザックは芸術の化身です！ あなた様によれば、彼の天性は獲得された才能よりも強力でしたし、彼にあつては、推敲がしばしば靈感を傷つけたのです…》^⑧

バルザック夫人の細部にわたっての批判に対して、サンドは11月24日、きわめて簡潔に見解を伝えた。

《走り書きでお返事を差し上げざるを得ません。お礼の言葉をありがとうございます。幾ばくかの喜びを与えられ、うれしく思います。つらい思いをさせるとすれば残念に思います。完全にご満足いただけるよう、できる限りのことをいたしましょう。お望みですから、あなたのお名前を消しました。「彼は天成の芸術家ではなかった」という語句を消しました。けれども、V. ユゴー氏の挨拶^⑨については言及しませんでした。版の冒頭に全文、掲載されるにちがいないと思うからです。高名な友が政治上の確固たる信念を持っていたことを断言すべきだとも思いません。彼の著作のみで判断して、私は彼の中にいかなる意見をもしのご客観性を認めます。彼が正統王朝支持派であると明言することで、彼を大いに過小評価することになりましょう。》^⑩ (*バルザックの墓前での弔辞)

両者の間でこれ以上、見解が交わされることはなかった。

VII.

《1人の天才について語るとき、「彼は本質的に善意の人間であった」と述べること、

それが私にできる最大の賛辞である》^①という言葉で始まる、サンド執筆の序文は、1855年刊行のウースィオー版『バルザック全集』の第1巻巻頭に付された^②。

本小論の冒頭にすでに、その1節を引用したが、序文は、文学観を大きく異にしながらも、1830年代初めから20年近い歳月、深い友情に結ばれて共に文壇にあつた作家バルザックを、言葉や思想のみならず、その感情や表情とともに、つまり、生きた人間として現出する。と同時に、同時代人たちの〈バルザック受容〉を詳細に伝える資料であり、また、筆者サンドがバルザックの創造の価値、意義をいかに捉えたかを明らかにするものでもある。

彼は常に、文学的にも、また、個人的にもひどい仕打ちに脅かされていたが、彼が他人を悪く言うのを一度として耳にしたことはない。心に微笑をもってつらい人生を生き抜いた。うぬぼれ、自らの芸術に熱中し、思い上がっているように見え——思い上がりは芸術家の無邪気さにほかならない（偉大な芸術家は大きな子どものようなものだ！）——、自らの個性を熱烈に崇拝しているように見えたが——それは自らの作品に対する情熱以外の何物でもない——、彼の流儀で、謙虚であった。

この偉大な批評家の不朽の作品は、彼以前に意味していたような小説ではない。彼は人間の生活の卓越した批評家である。想像力の単なる喜びのためではなく、風俗の歴史の記録文書、過ぎ去ったばかりの半世紀の報告書のために書いたのは彼である。

バルザックの作品で描かれたこれこれの性格、作者の文体や方法、意図や流儀に関する同時代人たちの非難は、現在すでにそう思われているように、非常に副次的な考察に思われるであろう。人間の思考から生まれたあらゆる創作に伴う不完全さをこの途方もない作品に責めはしないであろう。今日のわれわれに欠点と見える細部の冗長さや過剰までも好まれ、そしてこの細部もおそらくは未来の読者の興味や好奇心を完全には満足させるに到らないであろう。

どれほど進歩を成し遂げようとも、今日のわれわれにまだ多く類似しているであろう2000年あるいは3000年の読者たちに、われわれのなした進歩にもかかわらず、われわれが先人たちの夢や情熱や欲求をなお抱いているように、われわれの欲求や情熱や夢をまだ抱いているであろう、進歩した人々に言おう(…)《これは

真実だ！》(…)われわれの知的、物質的、精神的状況の真の現実であると。(…)バルザックは正真正銘の虚構の中に完璧な現実を描き出すという、彼以前には馴染のなかった問題をほとんど解決した。

未来の読者諸氏よ、1830年の人間たちはバルザックがあなた方の眼前に描き出すとおり、悪人で、善人で、狂人で、賢者であり、また、聡明で、愚かしく、夢想家で、実利的で、また、浪費家で、金もうけに汲々とした人間なのだ。彼の同時代人たちは誰もがこぞってこうした姿を認めようとしたわけではない。このことに驚かれはしないであろう。だが、彼らは心臓が動悸を打つを感じながら、これらの作品をむさぼるように読んだ、彼らは怒りに駆られながら、また、うっとりして読んだのだ。

骨の折れる、そして、創意に富んだ分類の結果、彼がその作品のすべての部分を首尾一貫し、本質に迫る1つに統合したとき、それらの部分の各々が、初めはわれわれ読者から最も低い評価しか与えられなかったものさえも、しかるべき位置を占めることで、われわれに対して、その価値を取り戻した。これらの本の各々が、実際、1つの大きな書物の一部分であり、この重要な部分が脱落していれば、書物は不完全なものであろう。

従って、全バルザックを読まなければならない。彼の作品全体にあって無関係なものは一つとしてない^⑧。

おわりに

美術評論家でもあったシャンフルーリは、1850—51年のパリのサロンで公開され、画壇に衝撃を与えたクールベの記念碑的大作——315×668cmの巨大なキャンバスに田舎町オルナンの60人近い《醜すぎる》住民たちをほぼ等身大に描き出した『オルナンの埋葬』(*Un enterrement à Ornans*, 1849-50年)を熱烈に擁護し、レアリズム運動の旗手となったが^⑨、彼は1853年末、サンドに書簡を送った。以後、1857年、彼の論文集『レアリズム』(*Le Réalisme*)刊行直前までの4年間に交わされた2人の書簡は「レアリズム」をめぐる展開したが、ロマン主義からレアリズムへの芸術思潮の変遷の中で、サンドの文学観を際立たせる重要な資料を構成している。一節を引用しよう。

《美しいものはことごとく真実です。それが善であると思われるならば、理想を真実にするのは、真実でしかないものを美しいものにすると同様に、真の芸術家の特権

ですよ。》^⑧ (1854年6月30日付)

ジョルジュ・サンドが与^{くみ}しているのは、美は真実を生み出すという主張にであり、小説に求めるものは実社会のいわば理想であった。

シャンフルーリはボードレール、プルドン、マックス・ビュション、クールベらとの熱い議論を結晶させた『リアリズム』(*Le Réalisme*, 1859)に、1855年9月、リアリズム論争の真最中に「ラルティスト」誌(*L'Artiste*)に発表した、「リアリズム論、サンド夫人への書簡」(*Du réalisme, Lettre à Madame Sand*)を収録した。

一方、サンドは、「リアリズム」(*Le Réalisme*)と題する論文を「クーリエ・ド・パリ」誌(*Courier de Paris*, 1857年9月29日号)に発表するが、出版されたばかりの『ボヴァリー夫人』(*Madame Bovary*)を賞賛し、そこに《濃縮したバルザック》を認めた^⑨。

【註】

1. G. Sand, *Honoré de Balzac*, (*Autour de la table* pp.199, 200) (*Oeuvres Complètes* de G. Sand, II, Slatkine Reprints, Genève, 1979)
2. G. Sand, *Histoire de ma vie*, IV partie, ch. xv. pp.161-162 (Bibliothèque de la Pléiade, t. II. éd. Gallimard, 1970)
3. Balzac, *Correspondance*, éd. de R. Pierrot, t. II, p.139 (Garnier Frères, 1962)
4. id., t. II. p.176.
5. Balzac, *Oeuvres complètes*, t. 24. p.680 Club de l' Honnête homme, (1956)
6. Balzac, op. cit., t. III, p.374 (1964)
7. Balzac, *Lettres à Madame Hanska*, 1832-1844, éd. de R. Pierrot, p.441 (éd. Robert Laffont, 1990)
8. Balzac, *La Comédie humaine*, I, p.195 (Bibliothèque de la Pléiade, 1976)
9. Balzac, op. cit., t. IV, p.405 (1966)
10. G. Sand, *Correspondance*, ed. de G. Lubin, t. V. pp.602-603 (Garnier Frères, 1969)
11. Balzac, op. cit., p.575
12. G. Sand, op. cit., t. V. pp.731, 732
13. Balzac, op. cit., t. III. p.638
14. G. Sand, *Le Compagnon du Tour de France*, Notice pp.31-32 (Presses Universitaires de Grenoble, 1979)
15. G. Sand, op. cit., t. VII, pp.55, 56 (1970)
16. G. Sand, *La Mare au Diable*, p.8 (éd. Garnier Frères, 1960)
17. id., pp.9, 11, 12

18. ex. Baudelaire, *Journaux intimes, Mon cœur mis à nu*, XVII, (Bibliothèque de la Pléiade, vol. I. pp. 686-687)
19. G. Sand, op. cit., t. XXIII, pp.332-333 (Bordas, 1989)
20. グルツィウス『バルザック論』, 317頁 (大矢タカヤス監修小竹澄栄訳, みすず書房, 1990)
21. G. Sand, op. cit., t. XI, p.685 (1976)
22. id., pp.733-735 この契約書のオリジナルはフランス学士院に寄贈されたくスペルベルク・ド・ロヴァンジュール・コレクション>にある (A311, fol. 63-64)

Entre les soussignés :

M. Houssiaux, éditeur, demeurant à Paris, rue du Jardinnet, n° 3..... d'une part, et Mad^e George Sand, demeurant à Nohant (Indre)..... d'autre part.

Il a été convenu et arrêté ce qui suit :

Article premier — *Mad^e. Sand s'engage à faire, pour M. Houssiaux, une notice bibliographique et littéraire, de douze à quinze mille lettres, sur Honoré de Balzac, et à lui en livrer le manuscrit dans le délai de cinq mois, à partir de ce jour.*

Article deux — *M. Houssiaux ne pourra se servir du travail en question que pour son édition des œuvres complètes de Balzac, c'est-à-dire, qu'il ne pourra le publier que sous forme de préface ou d'introduction, ou comme appendice, mais non en disposer en dehors de la collection des ouvrages de cet auteur.*

Seulement il lui sera permis, s'il le juge à propos, d'en reproduire quelques parties, à son choix, dans les prospectus ou réclames sur la Comédie humaine (titre de cette collection).

Article trois — *Madame Sand se réserve le droit de faire publier, quand bon lui semblera, la notice dont il s'agit, dans tout journal et même dans tout recueil de ses œuvres, mais elle s'interdit d'en autoriser l'impression dans toute autre édition des œuvres de M. de Balzac, sauf, à cet égard, la restriction qui sera ci-après stipulée.*

Article quatre — *M. Houssiaux s'oblige à prêter à Mme Sand, dans le délai d'un mois à dater de ce jour, une collection complète des œuvres de Balzac, et à lui fournir dans le même délai tous les documents nécessaires pour écrire l'article.*

Article cinq — *Les épreuves seront corrigées par Mad^e. Sand et devront lui être adressées à Nohant, aux frais de M. Houssiaux, Mad^e. Sand aura huit jours pour les renvoyer.*

Article six — *Le manuscrit devra être rendu à Mad^e. Sand après la correction des épreuves.*

Article sept — *La présente cession a lieu moyennant la somme de cinq cents francs, payable contre la remise du manuscrit.*

De plus M. Houssiaux devra donner à Mad^e. Sand un exemplaire complet de son édition des œuvres de Balzac.

Article huit — *Après un tirage de cinq mille exemplaires de la notice, le droit de M. Houssiaux sera éteint et Mad^e. Sand rentrera dans la pleine propriété de son travail, à moins que M. Houssiaux ne lui paye immédiatement, pour un second tirage qui ne pourra excéder le nombre du premier, une autre somme de cinq cents francs, et ne lui donne un nouvel exemplaire de sa collection. Dans le cas où M. Houssiaux s'y refuserait, Mad^e. Sand pourrait donc alors disposer de sa notice pour d'autres éditions des œuvres de M. de Balzac.*

Fait double à Paris, pour M. Houssiaux, le dix juin mil huit cent cinquante trois, et à Nohant, pour Mad^e. Sand, le lendemain.

J'approuve l'écriture ci-dessus

George Sand.

approuvé l'écriture ci-dessus

Alf^a Houssiaux.

23. cité par Thierry Bodin, *Histoire d'une Préface Autour de George Sand et de Balzac* (Revue de l'Académie du Centre, 1975. p.50)
24. G. Sand, op. cit., t. XII, p.141. (1976)
25. id., p.144.
26. id., p.155.
27. citée par Thierry Bodin. op. cit. p.53.
28. citée par Thierry Bodin, id.
29. id., p.54.
30. G. Sand, op. cit. t. XII. p.168.
31. G. Sand, op. cit. p.197.
32. この序文は1868年版ではテオフィル・ゴーティエのテキストに代えられる。サンドは1862年、ついで1875年に出版した芸術論文集『テーブルの周りで』(*Autour de la Table*, éd. Dentu, éd. Michel Lévy) に収録した。
33. G. Sand, op. cit. pp.197-198, 199-201, 203.
34. 画家自らが「現実的富意画」と呼んだ巨大な絵『画家のアトリエ』(*L'Atelier peintre*) (1855) の右側のグループにシャンフルーリが描かれていることは周知である。
35. G. Sand, op. cit., t. XIII, p.484 (1976)
36. G. Sand, *Questions d'art et de littérature*, p.219 (éd. Des femmers, 1991)